第28回 I G C —ワシントン—

I ワシントン大会雑感

本 座 栄 一（IGC 事務局長）
Eiichi HONZA

はじめに

第28回 IGC が1989年7月9日-7月19日にアメリカ合衆国のワシントン国際会議場で開催された。本会議は1984年にモスクワで開催された第27回 IGC から5年目にあたる。次回が3年後の1992年に日本で開催され，現在のところ，事務局を地質調査所に設けるとのことで，本会議に参加して，主としてワシントンにおける IGC の組織，運営等を見てきた。組織委員長，事務局長をはじめ各種小委員会委員長，AAPG 等の会場運営責任者等多くの人々から話を聞いた。

米国への IGC の招請

米国の地質関係者は第28回 IGC の招請に関して関連機関と連絡をとり，1980年のパリにおける第26回 IGC で米国への招請を表した。同年10月に USGS（米国地質調査所，当時 H. W. Menard 所長）が IGC 開催を支持し，支援することを約し，USNC 地質委員会（C. L. Drake 委員長）へ第28回 IGC の共催を要請した。途中，1988年が米国地質学会の100周年と重複することから，日本が先に開催できるか打診したようである。日本から無理であるとの返事に，1年遅らせて1989年に開催することにして，モスクワにおける第27回 IGC で承認された。

第28回 IGC の準備状況

1982年2月に USGS（D. L. Peck 所長）は IGC 支援に関する内・外部との協議で，以下の点で合意している。

1) USGS は IGC 開催のために特別に予算を得ることはしない。
2) 毎年10万ドルを3年にわたり，IGC に支出する。
3) 共通性のあるドキュメント（報告書，マップ類）を出版する。
4) 組織委員会が USGS の計算機を使用して，郵送リストや財政記録を作ることを認める。
5) USGS の研究者が組織委員会に協力することに問題はない。

この取り決めに関して，1984年1月にも USGS 内部で検討がなされている。

1984年8月の第27回 IGC の評議会で第28回 IGC を米国で開催することが正式に決り，同年11月には組織委員会の構成，事務局等が USNC 地質委員会で決定した。1985年4月に第1回の組織委員会が開かれ，小委員会とその委員長，住所，電話，テレックス等が決った。同年11月に IGC の銀行口座を開設し，USGS により最初の補助金10万ドルが払い込まれた。

1986年9月にファースト・サーキュラーが発行されたが，15万部印刷したとのことである。同年11月に USGS から2回目の補助金をうけ，同時に DOE，NASA，NSF 等へ資金援助を要請し，AAPG，SAA に貸付金を要請している。同年にはレーガン大統領の IGC 支援要請の親書を携えて，企業への寄付金要請も行っている。

1987年3月にファースト・サーキュラーの返事をまとめ，巡検を整理した。1988年4月にセカンド・サーキュラーの発行，同年9月に登録開始，12月にアブストラクトの締切り，1989年1月にアブストラクトの選定作業を行い3月に郵送による登録を締切った。

IGC 開会直前

7月9日の開会に先だち，幾つかの行事を見ておく方が良いであろうとの B. Hanshow 事務局長の連絡をうけ，3日前の7月6日にワシントンの国際会議場を訪れた。そこにはボーイ・ガールスカウトの少年少女と学生38名による登録者に渡すバッグの中身のつめ込み作業の際中であった（写真1）。展示会場は機具を大型トレーラーで搬入中であり，会場は雑然としていて，これで開会までの2日間で準備が完了するのかと不安な気持にもなった（写真2，3，4）。

写真１　第28回 IGC の開かれたワシントン国際会議場の正面玄関

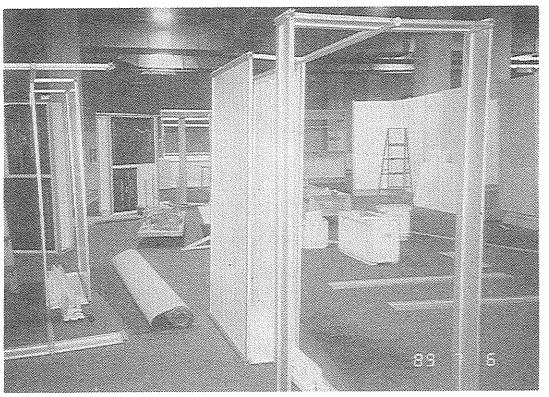

写真３　受付け等のカウンターの作製作業。受付け開始二日前には未だ何もできていない。

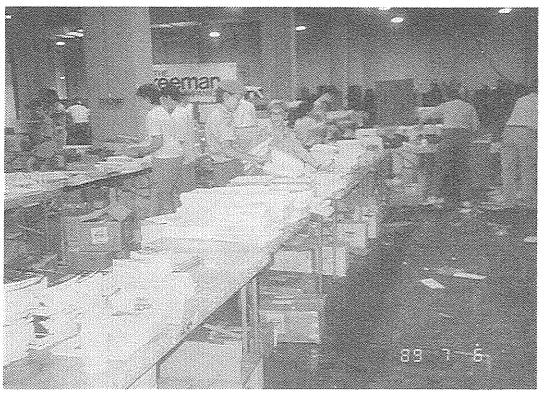

写真２　ボーイ・ガールスカウト，学生のボランティアによる資料のバッグへのつめ込み作業

写真４　スライド準備室

７月７日の朝９時-10時に AAPG の会場責任者の案内で関係者全員が２班に分れて，国際会議場を見て回った。10時から12時まで最終の組織委員会が開かれ約30名が出席した。筆者も臨席させてもらい，C. Drake 会長から紹介をうけ，会議が始った。B. Hanshow 事務局長の報告によると，この時点における登録は3,832名（うち学生303名）であり，開会後500-1,000名の登録があるものと推定していた。展示の申込みは，481件であった。続いて各小委員長の報告と打合せが行われた。それを聞いていて感じたことは，いろいろのトラブルがあるものだということである。最悪のケースとして，コンビナーが何もしないため10人の講演者のセクションを中止せざるを得なくなったとのことである。又，ラマダホテルの宿泊予約が重複し，15名のＶＩＰがキャンセルされた。討議のなかで法律顧問への質問が集中し，お国柄もあろうか，法律顧問が大きな役割をはたしている様子が伺えた。法律顧問から私へのサジェションとして，金を扱う人は責任者１人として，そのサイン無しでは使えないようにすることが大事であり，そうでないとどんぶり勘定になるとのことである。これらのトラブルを聞いていて日本開催時にも大なり小なり同様のトラブルがでるものと考えられた。

７月９日の開会式（写真６）は午後３時から行われたが，２時半に開門し，出席者は約2,300名であった。たまたまパリで開かれたサミットと重複し，ブッシュ大統領が欠席し，ハルバーティ氏が大統領のメッセージを代読した。次に内務省長官，USGS 所長の挨拶，第27回 IGC 会長の Kazlousky 氏による C. Drake 会長と B. Hanshow 事務局長の指名，C. Drake 会長の挨拶，IGC 評議会における次回日本開催の決定と次の中国開催の予備決定の報告があった。IUGS 会長，ICSU 会長，UNESCO 委員長，B. Hanshow 事務局長の経過報告と続き，C. Drake 会長による開会式終了挨拶まで丁度一時間半であった。

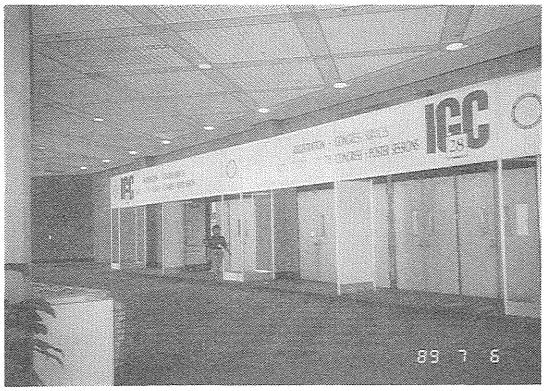

写真5　国際会議場の受付け入口

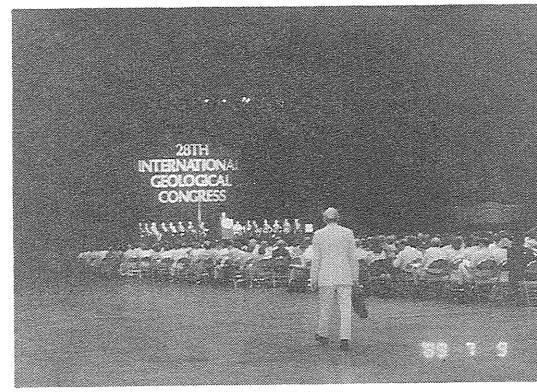

写真6　開会式 C. L. Drake 組織委員長の挨拶

IGC 開催の資金

本会議開催の資金は，前述の USGS による拠出金30万ドルと出版物の印刷の他に政府機関20，州立地質調査所50機関からの拠出金等で合計110万ドルをうけ大学・学会，企業，個人の寄付金が40万ドルあり，計150万ドルで運営された。又，登録料は4,500人が参加と見込み，1人200ドルで計100万ドルとしたが，実際には5,900人登録し，しかも会場で250ドル払って登録する人が多かったため，これを大きく越えている。

登録，会場運営，展示会は，AAPG が担当したが，AAPG はワシントン国際会議場創立以来25年間にわたり各種の会議の運営にあたってきている。今回は5年前に予約し，2年半前から打合せをしてきている。組織委員会とは2年前から打合せをして，給与，経費の支給をうけている。

展示会は当初50万ドルの収入を予想したが，実際は39.6万ドルであり，組織委員会としては，ほとんど収益はなかったと言っている。最初の展示要請書を20ケ月前に送り，契約の要請を11ケ月前に送った。出展した企業と研究機関の割合は，前者が42%，後者が58%であった。

巡検の収支はゼロであり，収益をあげていない。巡検ガイドブックは130編作成したが，それぞれ50部を著者に贈呈している。中止で使用されなかったものは他の用途に回すことにした。

ジオホストと言って，開発途上国等の研究者の参加を補助するものがある。C. Drake 会長はじめ多くの関係者から日本でもぜひ実施してほしいと，強く要請された。今回は東ヨーロッパ，東南アジア，アフリカ等の研究者79名を招待した。特典は登録料無料，ドミトリー，ホームステイ等の滞在費無料，巡検の一部負担（最大600ドル），飲食費200ドル支給（50人），航空券の一部負担（60%）である。これらの財源は政府から5万ドル，UNESCO から3.7万ドルである。

登録者は全てを含め6,000人を越えたと考えられるが，7月17日（月）までで，5,888人であった。内訳は米国3,261名，カナダ259名，フランス208名，ソ連207名，西独187名，イギリス161名，イタリー145名，日本129名，中国127名，豪104名，その他1,100名である。

その他のイベント

IGC の準備期間中から IGC ニュース（Gazette）を発行し，会期中は毎日発行した。前日の講演のトピックス，報告，お知らせ，国際連合組織の会長，組織委員会責任者の談話等を掲載し，好評を博していた。次回開催国の日本の佐藤正組織委員長の談話も載った。

ショートコースとワークショップは7月15日（土）と16日（日）の2日間に開かれた。50テーマが企画され，最終的に20テーマとなったが，実際的には10テーマで十分であったと考えられている。政治的関心がある人には興味のあるテーマとなっていて，研究者には高すぎると言われている。統括責任者である小委員長の感想には，ワークショップは必要ないとのことである。会場外でコーヒーでも飲みながら討議すればすむ話であるとのことであった。

開会式の直後に展示会場でパーティーが開かれた（写真7）。ビール2本位の券と10cm径の紙小皿にのせたつまみ，小ビーフバーガーが出され，それ以上の飲み物は有料，参加者は飲みながら展示場を回遊していた。

閉会式前日のパーティーはワシントンの議事堂と記念塔の間のザモールという広場の一隅に大きなテントをは

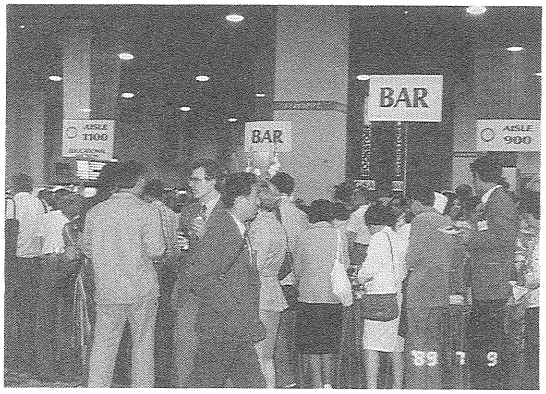

写真7　展示会場での開会パーティ

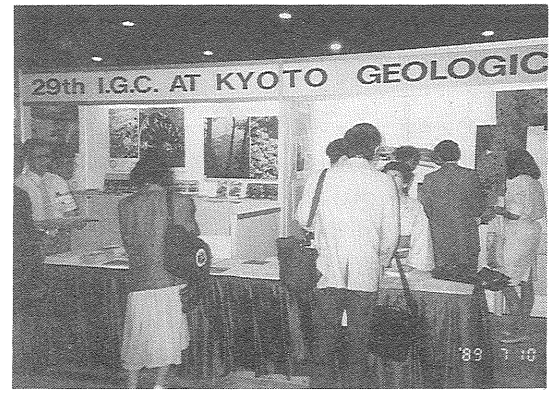

写真8　展示場における第29回 IGC 京都の宣伝ブース

っての野外パーティーであった。これにはビール券2枚，ワイン券1枚，食事券1枚が付いていて，食事はチキン半分に蒸しまめ，ポテトサラダである。他にポップコーンの無料サービスがあった。中央にデキシランドジャズバンド2組が交互に演奏しているといったもので2,000人弱が参加したと推定される。

その他会期中多くの限定パーティーがあり，主催者は組織委員会々長，USGS レストン，USGS 所長，展示関係者，スミソニアン，DOSECC，IUGS，ボランティア関係者，各国大使館等であり，個人主催のものも数多くあったようである。

組織委員会の打上げパーティーのようなものが16日の日曜日に昼食会として，国際会議場前のグランドハイアットホテルで行われた。ここで昼食を食べながら，会場で売り物にしていた IGC のマーク入りのサイフを，功労をねぎらいながら渡した。佐藤正氏と私も会食に呼ばれ，用意した余りの2つのサイフをもらった。

アンケート調査について

地質調査所の好意で，第29回 IGC 京都のブースを1区画隣りに設けて，京都のパンフレットとアンケート用紙を配った（写真8）。ここでは会場小委員長の西村進氏（京都大学），京都国際会館大西保氏，展示担当会社フジヤの浅井恒宏氏の派遣と協力をいただいた。

アンケートの回答は1割強であったが，以下の事がわかった。

1）第29回 IGC への出席予定者は回答者の75％にのぼる。

2）専門分野は多岐にわたるが，地質と回答したものが30％。

3）シンポジウムの分野希望は資源が21％，テクトニクスが18％で特に多かった。

4）宿泊はドミトリー希望が25％で日本旅館の70ドル，50ドルの計が28％あり，他は数％づつであった。

5）巡検希望は日本国内が66％，国外が9％，他は参加する意志がないといった回答であった。

おわりに

第28回 IGC の準備段階から終了まで取材し，組織委員会の各責任者から聞いた話は，次回京都での開催に多いなる参考になった。上記の他に以下の点があげられる。

1）講演者のキャンセルが多かったが，その理由として以下の事が考えられる。今回のセッションはコンビナーを決めて，一部にコンビナーによる講演招請もあったが，大部分は応募によりそれを各セッションへふり分けた。従ってコンビナーと講演者のつながりが薄く，キャンセルし易い状況にあったためと考えられる。一部に連絡不十分のセッションもあった。

2）ボランティアが活躍している。小委員会責任者，巡検等にも退職者の活躍があり，ボランティアだけで10万ドル位の収益に相当するとのことである。

3）政府関係予算が3分の2しめているため，予算関係では楽であったと解されるが，最後に20万ドル不足と考えられたとのコメントもあった。日本の場合，政府関係予算が無いに等しいので，資金に関してかなりの問題が出るであろう。

4）多くの実施事項にそれぞれ責任者が必要であり，多数の方々の協力が必要となる。今回の組織委員会は，その実務責任者の30名から成っている。実務を分担していない人は組織委員会にはいない。

5）京都での会期が9月に入ることから一部の国，特

に北方と南半球の国々では夏休みが終了することがあり，出席を辞退する研究者がでることが考えられる。

6) アコモデーションにドミトリーは不可欠であると感じた。京都ではお寺しか考えられないとの事である(京都グループ談)。大部屋ではあるが問題はないとの意見が多かった。問題はシャワーであろう。

7) 巡検の数はそれほど多くなくても良いようである。候補の1/3強が実施されていることから，候補を厳選して50で十分と考えられる。又，如何に費用をかけないで実施できるかも検討する必要があろう。

8) 全体として時間に対しては厳守している。開閉会式からセッションに至るまで，VIPから講演者まで，これが要求されている。

3月 USGS 訪問時，今回の7月6日～7月19日の会期中に C. Drake 組織委員会会長，B. Hanshow 事務局長をはじめ，各委員会委員長，AAPG 担当者に忙しい中を懇切丁寧な説明をうけた。最終組織委員会に出席させていただいたために，各責任者と顔なじみになったことも大きく寄与していたものと思われる。また，日本からの出席者からも種々の情報をいただいた。厚くお礼申し上げる。

II　ワシントンIGC印象記

石 原 舜 三（地質調査所長）
Shunso Ishihara

プロの地質家になって30年以上になるが，私は今回初めて IGC に出席した。しかも開会式の前日に到着し，閉会式後にワシントンを離れると言う熱心さであった。IGCにこれまで出席しなかった理由は特にはないが，若い頃は実質的な実りが多いペンローズ式の専門家集団の会議に好んで出席した。

IGCの利点に地球科学のあらゆる分野の人が一堂に会する点がある。今回，私もその恩恵に浴し，会って話したい人，また思いがけない人達に多く出会った。この点は今回の IGC がホテルに分散する形でなく，コンベンション・センター1ケ所で行われたことにも負っている。

IUGS 会長講演記

さて，開会式に出席して，IGCは前回以後の学問の進歩を IUGS 会長がレビューすることを初めて知った。今回はブラジル出身，地球化学の U. Cordani 氏が，この過去5ケ年にはかつてのプレートテクトニクスの様なブレークスルーはないが，としながらも顕著な業績の概括をおこなった。

彼のレビューで印象に残ったことは，まず堆積岩中のダイアモンドである。これはカザクスタンの堆積岩源の片麻岩の柘榴石中のインクルージョンとして発見されたものだが，これは原岩の有機炭素がサブダクションにより，少くとも130kmは沈み込んだ圧力により生成したものだと言う。表層堆積物のサブダクションによるマントルへの沈み込みはアンデス山地で現世の溶岩の^{10}Beを測定することによっても提案されている。この同位体は宇宙線と大気中の O, N との相互作用により地表で生ずるものであるが，サブダクションにより数100万年の比較的短時間にマントルに達し，マグマと一緒に地表に戻ってきたと考えられている。

近年，イオンプローブ他の分析機器の進歩は著しく，単体結晶の年代測定などが可能となっているが，西オーストラリアの堆積岩源変成岩の砕屑性ジルコンでは43億年の年代が得られた。この事実は地殻創世期に花崗岩地殻がすでに出来ていたことを暗示する。多量の大陸地殻がアーケアンに生成していたことは Nd 同位体からも主張されている。

比較惑星学もこの期間に著しく進歩し，特にソ連の探査機ベネラ15，16により金星の詳細が判明した。この星は太陽系のどの星よりも地球に似ており，上部マントルの温度，リソスフェアや大陸地殻の状態などから判断して金星の現在は，地球ではアーケアン初期の状態であるらしい。

比較惑星学は隕石衝突による cratering が重要な地質現象であることを教えるが，一般に古い隕石孔はより新期の造山運動などで消滅している。白亜紀／第三紀境界にイリジウム (Ir) 異常が発見され，それは隕石衝突に